

マリーナ号とヴェネラ号の観測に基づく金星の世界、そして古くから運河や極冠で有名な火星の世界の紹介である。

以上、本書の内容を大まかに紹介したが、全体を通して写真や説明図が非常に多く採用されており、(ほとんど、一頁に一つの割合) また、ゴジラ君が何度も登場したりして肩がこらずに楽しく読むことができるよう配慮されている。なるべく多くの人々が科学に興味を持ち、かつその新しい成果を知ることは、科学の底辺を上げ科学の発展の一つの重要なファクターとなるが、本書はその立場からの本として一応その目的を達していると思われる。(湯浅学)

日本の暦

岡田芳朗著

(木耳社, B6判, 394頁, 1,200円)

天文学関係の本は毎年かず多く出版され、この欄でも毎号紹介されている。然し暦に関する本は比較的すくない。暦関係の適当な本は?と尋ねられても現在すぐ入手できそうなものがなくて困ってしまう。このような時、本書が出版されたことは大変喜ばしい。

従来の定評のある暦の本は、いずれも天文畑の人によって書かれた自然科学史として、暦法の発生・発達に重点がおかれている。

本書の著者は文科出身であり、現在女子美術大学で歴史の授業を受持っておられる。それ故に本書は、暦が民衆のなかにどのように生きて来たかという、暦と社会とのつながりにウェイトのおかれている暦の文化史である。

改暦前の太陰太陽暦では、毎年、各月の大小、つまり或る月が30日あるのか、29日なのかは暦が発売されるまで一般には分らない。月の大小が分らなければ、毎月末、即ち晦日(みそか)に清算する習慣になっている勘定の受渡しの日が分らずに困って仕舞う。この為にも、月の大小だけは何を措いても知っておく必要があった。この一年間の大小の配列を示す為に大小暦というのがあった。これは一枚の紙に毎月の大か小かを、適当に絵や歌の中に織り込んで、判じ物のようにしたもので、その絵や歌にかくされたアイデアの巧拙を競うのである。江戸時代、貞享・元禄の頃より当時の知識階級に流行したものである。いくつかの写真によって、この大小暦が例示されているのを初め、貞享の改暦と西鶴・近松、あるいは暦の茶室、各地の暦、キリシタン暦、更には元号の始行と、従来の暦の本には書かれていなかったことに

多くの頁がさかれている。

岡田氏は勤務の休暇を利用しては、南は石垣島から北は東北の寒村へと、丹念に史料をもとめて旅をし、話は沖縄暦からアイヌの暦にまでわたっている。

更には、著者が永年にわたって調査されて来た明治改暦の項を読めば、今、人々が何も感ずることなく使用している太陽暦への改暦が、民衆の立場を無視して、どのように強引に行なわれたかを知って読者は驚くことであろう。

正統的な(?) 暦の本に語られなかった、これらの多くの興味深い話を読んで、この本が誰かの「一冊の本」になって暦学に興味を持たれる人が出ることを期待して、一読をおすすめする。

ただ、実際の太陽年の長さとして 365.242218... 日としているのは少しく違し、平均期望月の 29.5305882 日も昭和35年以前の理科年表の値である。

(内田正男)

雑報

NGC 5253 星雲に超新星出現

カリフォルニア工大の Mr. C.T. Kowal は NGC 5253 星雲 ($\alpha=13^{\text{h}}37^{\text{m}}1$, $\delta=-31^{\circ}24'$) の核から 56 秒角西, 85 秒角南の位置に光度 8.5 等の超新星を 5 月 13 日に発見し, 15 日に確認した。この超新星は銀河系外星雲に出現した超新星では、観測史上 4 第番目の光度である。なお NGC 5253 星雲には、1895 年に光度 7.5 等で観測史上第 2 番目の光度の超新星が出現している。本年の超新星は、アジアゴ天文台の Dr. R. Barbon と F. Ciatti によるスペクトル観測によると、タイプ I の超新星で、極大光度は 5 月 4 日頃であったらうとのこと。(香西洋樹)

(192 頁よりつづく)

科学者 1 名を含む) が設置された。

4. 国際学術交流について

国際学術交流、とくに日中学術交流の強化について、学術交流委員会と原子核特別委員会から、それぞれ提案がなされたが、審議の結果、日本学術会議の国際学術交流五原則を確認した学術交流委員会の原案に、朝鮮民主主義人民共和国との学術交流強調と、学・協会等の意見もきき、日中学術交流は、学術会議が中華人民共和国の中国科学院を相手として促進に努力し、中華人民共和国を国際学術団体に加盟させるための努力をほらうなどの点を加えた修正案が多数で可決された。